

Ⅶ 荒神山古墳と近江

前方後方墳から前方後円墳へ

方形周溝墓の伝統

前期古墳を考える上で、弥生時代の墓制は重要な資料を提示している。とくに注目されるのは方形周溝墓という弥生時代に固有の墓制である。弥生時代以前にも集落を単位とする共同墓地は存在したが、水稻農耕の到来は、自然の大地を食糧確保の生産手段である土地に変え、富を生み出す源として土地に対する執着をそれ以前とは比較にならないほど強く意識し執着したであろう。その結果、墓地においても共同墓地の中を区画して一定の土地を墓として占有するようになった。それが遺構として顕在化したものが方形周溝墓であると考えられる。

方形周溝墓が誕生した当初は、各方形周溝墓に規模の格差は認められず、共同墓地内に同規模の方形周溝墓が等しく群集するものであったが、やがて特定の方形周溝墓に規模などにおいて卓越したものが認められるようになり、格差を生じるようになる。集落内の特定の家族や個人だけが卓越した状態で埋葬されるようになったのである。ただ、それでも共同墓地内に埋葬されることに変わりはない。ところが、ついに共同墓地を離れ、家族的な臍帯からも抜け出して、特定の個人だけが共同墓地から隔絶した位置に特別の葬法で埋葬されるようになる。その被葬者こそ、拠点集落のさまざまな権限を奪取し、富を一元的に掌握することに成功した統治者の姿と理解される。水稻農耕がもたらした弥生社会は、原始的な共同社会の中に長く埋没してきた家族を可視化させるとともに、さらに家族的な血縁的臍帯をも脱した統治者を生み出したといえよう。

近江において、こうした統治者は、方形周溝墓の伝統の下に前方後方墳を築くようになる。ただ、方形周溝墓から前方後方墳への発達はそれほど容易ではない。両者の間には幾つかの段階が存在したと考えられている。そのことを模式的に述べると、まず方形周溝墓の一辺の周溝の中央に陸橋部を造り出したものが現れ、その陸橋部が徐々に発達して前方部を形成するに至ったと理解される。当初、埋葬主体への通路であり祭祀の場であったものが、墓前祭祀の形態が発展する過程で、その場が成長し独立して前方部を生み出したということであろう。なお、地域ごとに見ていくと、必ずしもこうした進化論的な発達を示すものではないことも明らかになってきている^(註1)。地域間の交流や祭祀形態の地域差などが介在して、実態はさらに多様である。

前方後方墳の時代

以上のような段階を経て出現した前方後方墳が、近江各地で確認されるようになる。彦根市内ではこうした様相をいまだ確認できていないが、出現期の前方後方墳の実態については、植田文雄氏の精力的な論考がある^(註1)。植田氏は近江の弥生後期から古墳時代にいたる

土器研究を前提として、出現期の前方後方墳を5期（Ⅰ期～Ⅴ期）に分類している。土器編年としては、おおよそ庄内式～布留式古段階併行であり、一般に弥生時代後期末から古墳時代前期前半と理解される時期である。以下、その概要を簡単に記すことから始めよう。

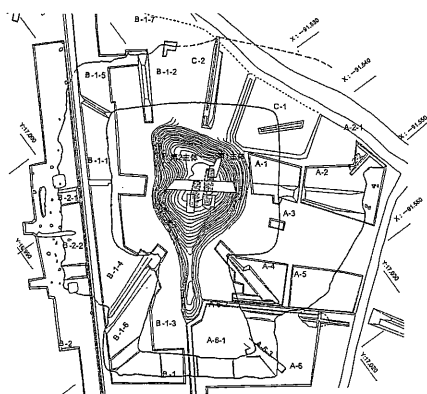
出現期の前方後方墳 Ⅰ期 Ⅰ期は前方後方墳が誕生する時期である。近江では、法勝寺遺跡 SDX23（米原市）と神郷亀塚古墳（東近江市）があり、県外では愛知県廻間遺跡 SZ01などが存在する。法勝寺遺跡 SDX23は、全長22.4m で前方部が全体の1／3強にまで発達し、前方部前面にも小規模ながら区画溝が巡っている。ただ、SDX23の周囲には方形周溝墓が群在しており、共同墓地から突出するまでには至っていない。神郷亀塚古墳は全長37.9m で幅の広い周溝を伴っており、周溝底からの墳丘は3.8m を測る高塚である。後方部中央には2基の舟形状木棺を納めた木槨が確認されており、共同墓地を離れて単独で築造されている。神郷亀塚古墳のこうしたあり方は、弥生時代以来の墓制とは明らかに異なる古墳に相応しい様相であり注目される。因みにこの時期に大和では、初期の前方後円墳である纏向石塚古墳が誕生している。

出現期の前方後方墳 Ⅱ期 Ⅱ期には、近江の高島市熊野本6号墳や愛知県の西上免遺跡 SZ01のほか、新たに富山県でも向野塚で前方後方墳が築造されている。熊野本6号墳は、琵琶湖を望む丘陵に立地する前方後方墳である。全長28m だが、前方部は8m とかなり短い。高さは4.4m を測り、琵琶湖側に後方部が拡張して非対称形を呈している。

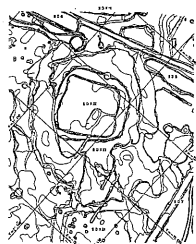
出現期の前方後方墳 Ⅲ期 Ⅲ期になると、近江の長浜市高月町小松古墳や近江八幡市浅小井遺跡 SX01のほか、石川県に6基、岐阜県に1基、長野県に1基、千葉県に4基、京都府と奈良県でも1基ずつ確認されるなど、分布域が拡大している。小松古墳は、奥琵琶湖を望む古保利丘陵の山頂に築かれた132基を数える古保利古墳群中の1基である。古保利古墳群は、琵琶湖の北の玄関口である塩津港の権益を掌握した統治者層の古墳群として注目される古墳群である。その内の1基である小松古墳は全長60m、高さ5m を測る均整のとれた墳形を示しており、主体部からは多数の土器とともに、2面の破鏡・銅鏃・鉄鏃が出土している。浅小井遺跡 SX01は、弥生時代後期の環濠に接して築かれた全長35m の前方後方墳である。前方部は11m と小規模である。この時期の前方後方墳は、分布域の拡大とともに、丘陵や山頂に立地するものが多くなり、副葬品に鏡や鉄器を保有するものが出現している。

出現期の前方後方墳 Ⅳ期 Ⅳ期からは類例が急増するようになり、該当する前方後方墳は37基を数え、分布域も北は福島県から南は佐賀県まで拡大している。この時期、近江では守山市と隣の栗東市で集中的に7基が検出されている。守山市の播磨田東遺跡 SX1・塚之越遺跡前方後方形周溝墓・経田遺跡 SX3・益須寺遺跡 SX1・同1号墳・横江遺跡 SX3、そして栗東市辻遺跡 A 地点 SX6である。いずれも11.2m～23.7m と規模が小さく、統治者層の古墳とは考え難い。この時期には、大和で箸墓古墳など巨大化した前方後円墳の築造が始まっている。

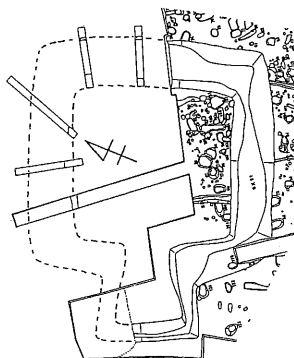
出現期の前方後方墳 Ⅴ期 Ⅴ期になっても前方後方墳は増加の一途をたどり、Ⅳ期よりさ



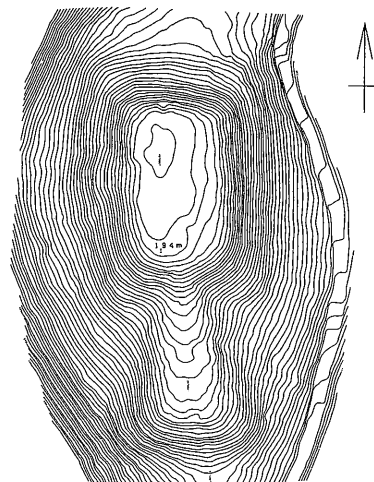
神郷亀塚古墳（Ⅰ期）



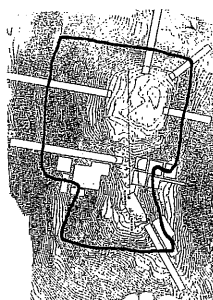
法勝寺遺跡 SDX23（Ⅰ期）



浅小井遺跡 SX01（Ⅲ期）



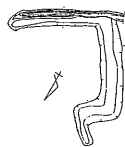
小松古墳（Ⅲ期）



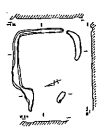
熊野本6号墳（Ⅱ期）



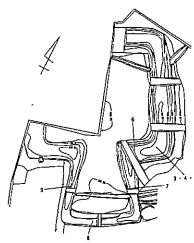
辻遺跡A地点
SX6（Ⅳ期）



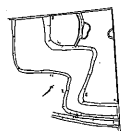
益須寺遺跡
1号墳（Ⅳ期）



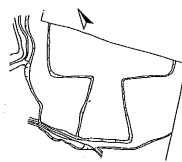
横江遺跡
SX3（Ⅳ期）



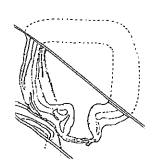
益須寺遺跡
SX1（Ⅳ期）



経田遺跡
SX3（Ⅳ期）



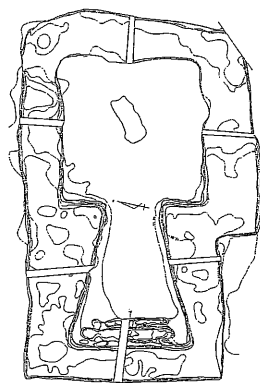
塚之越遺跡
（Ⅳ期）



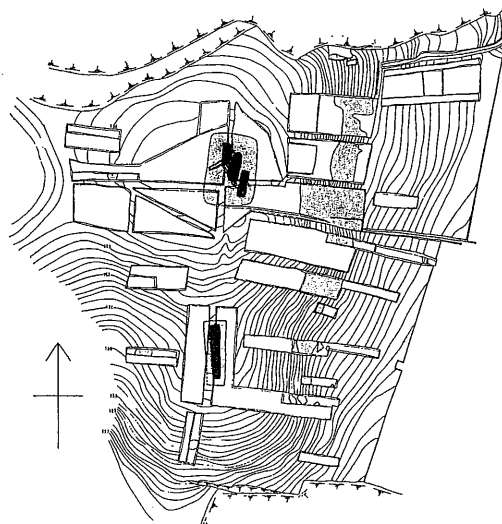
播磨田東遺跡
SX1（Ⅳ期）



岩畑遺跡
SX2（Ⅴ期）



富波古墳
SZ1（Ⅴ期）



皇子山1号墳（Ⅴ期）

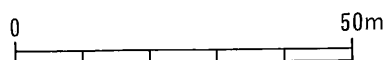


図46 近江の出現期前方後方墳

らに増加して51基を数える。分布域も拡大し、東は宮城県まで広がり、新たに中国・四国地方が加わる。栃木県藤本観音山古墳は、出現期の前方後方墳としては最大の全長117.8m、後方部の高さは11.8mを測り、前方部に2段、後方部に3段の段築、最上位に葺石を施している。東海地方では愛知県東之宮古墳が、全長72m、高さ8mを測り、竪穴式石室に割竹形木棺を配し、4面の三角縁神獣鏡を含む11面の鏡、鍬形石などの玉石類や鉄剣・鉄刀など多量の鉄器類が副葬されている。北陸地方では富山県柳田布尾山古墳が、全長107m、高さ9mを測り、地域最大級の威容を示している。瀬戸内地方では、全長48.3m、高さ3.8mの岡山県備前車塚古墳が築かれている。規模はそれほど大きくないが、墳丘には葺石が施され、三角縁神獣鏡を含む13面の鏡や鉄鏃・鉄鉾など多数の鉄製武具が副葬されていた。特殊器台形埴輪の発見で知られる岡山県都月坂1号墳も、全長33mの前方後方墳である。また、この時期に前方後円墳を数多く築いた大和盆地東山麓の膝元でも、全長120m、高さ14mの前方後方墳である下池山古墳が築かれている。

そして近江では、大津市皇子山1号墳、野洲市富波古墳SZ1、栗東市岩畑遺跡SX2が存在する。皇子山1号墳は、琵琶湖を見下ろす山頂部に築かれた前方後方墳で、全長60mを測り、後方部に10m×7mの中心墓坑があり、葺石を施している。葺石や墳形は、琵琶湖に面する側がより丁寧に整備されており、湖上からの景観を重視したものと考えられており興味深い。富波古墳SZ1は、野洲川右岸の平地に築かれたもので、全長42mを測り、長方形に近い周溝が巡るが墳丘を残していない。岩畑遺跡SX2は、全長21mと比較的小規模であり、周溝が巡るがやはり墳丘は遺存しない。

V期になると、前方後方墳に定型化の傾向が認められるようになり、地域的には東北地方から中国・四国地方を加えた北部九州にまで分布域が広がった。しかも、各地の主要古墳が大和と四国の一部以外は、主に前方後方墳であるという点は留意すべきである。一方、依然として小規模で墳丘の乏しい前方後方墳も存在するなど、規模において格差が顕著となっている点も見落としてはならないだろう。

出現期前方後方墳の画期 以上、出現期の前方後方墳についてI期からV期の展開過程を概観すると、近江あるいは東海地方で誕生した前方後方墳は、その後、日本海ルートと太平洋ルートで東へ、やや遅れて瀬戸内ルートで西へと伝わり、V期には北は東北、南は北部九州にまで分布域を広げている。この間、画期となるのはI～Ⅲ期とⅣ・V期である。墳丘の構造を見ると、I～Ⅲ期では前方部の形状はいまだ不定形のものが多く、その規模も相対的に小さく伸張過程にある。Ⅳ期には前方部の伸張が著しくなりV期で定型化する。Ⅳ・V期の前方後方墳には、墳丘上に葺石を設けたり、段築を施したものも出現している。埋葬施設の検出例はそれほど多くないが、I～Ⅲ期では弥生時代以来の木棺直葬が主流である。ところがⅣ・V期になると竪穴式石室を築くものが現れ定着する。副葬品においても、I～Ⅲ期では弥生時代以来の地域色を継承する副葬品が多くを占めているが、Ⅳ・V期には三角縁神獣鏡や二重口縁壺の副葬が顕著になってくる。つまりI～Ⅲ期の前方後方墳は、定型化に至る

成長過程にあると見ることができ、埋葬施設や副葬品についても多分に弥生時代以来の地域色を継承するものであった。ところがⅣ・Ⅴ期になると、墳丘の構造・埋葬施設・副葬品などにおいて古墳時代前期の前方後円墳と共通する要素が加わるようになる。この時期、前方後円墳の世界では、大和盆地東山麓において、最初の定型化した前方後円墳と考えられている箸墓古墳がⅣ期に誕生し、Ⅴ期には定型の前方後円墳が累々と築かれている。ただ、前方後方墳に新たに加わったすべての要素を、これらの前方後円墳からの影響と即断するのは危険であろう。Ⅳ期からⅤ期へと前方後方墳の分布域は拡大を続けており、Ⅴ期には東北地方から中国・四国地方を加えた北部九州にまで分布域が広がっている。しかも、各地の主要古墳は、大和と四国の一部以外は、主に前方後方墳であった。こうした地域で生まれた前方後方墳の要素が、大和で定型化した前方後円墳に影響を与えたものも存在したと推測される。

このように見てくると、前方後方墳が前方後円墳の影響下に成立したとする論は成立し難くなる。前方後方墳は、弥生時代以来の墓制である方形周溝墓の伝統の下に誕生し、自立的な成長をとげながら分布域を拡大した。その過程で、前方後円墳と相互に影響しあうようになり、やがて定型化に至ったと想定される。

前方後方墳から前方後円墳へ

近江では、Ⅰ期からⅤ期に至る5期の間、つまり土器編年の庄内式～布留式古段階併行(弥生時代後期末～古墳時代前期前半)の間、方形周溝墓の伝統の下に出現期の前方後方墳が継続的に築かれてきた。

一方、大和盆地東山麓を起源として、Ⅳ・Ⅴ期には畿内型と称される定型化した巨大な前方後円墳が築造される。この時期の前方後円墳は、左右対称の前方後円形の墳丘、墳丘を覆う葺石、墳丘を巡る埴輪、被葬者を埋葬する竪穴式石室と長大な木棺が特徴的であり、木棺内には鏡、鍬形石・車輪石・石釧などの石製腕飾品、勾玉・管玉などの装身具、鉄製の武器・武具、鉄製の農工漁具など多種多様な副葬品を納めた。こうした100mを超える規模の前方後円墳が、大和盆地で累々と築造されるようになり、大和を中心に結束する連合政権の存在が想定された。

強大化した大和政権の勢力は、やがて前方後円墳を築いてこなかった周辺の地域にも及び、大和政権を頂点とする政治体制が確立していくことになった。近江でも古墳時代前期前半頃になると、大和政権の勢力の進出が顕著となり、これまで前方後方墳を築いてきた在地勢力に多大な影響を及ぼすようになる。

ただ、大和政権の進出に対して在地勢力が示した様相は一様ではなかった。日本海に近い湖北、広大な平野を擁する湖東、大和に近いが独自性の強い湖南、北近畿と接する湖西、それぞれが弥生時代以来の伝統を内在しつつ前方後方墳を築いており、そのことが前方後円墳の受容に当たっても異なる対応を示すことになったと考えられる。

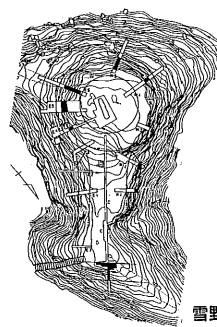
湖北地方の様相 日本海に近い湖北では、奥琵琶湖を望む古保利丘陵の山頂に132基を数え

る古保利古墳群が存在する。古保利古墳群は、琵琶湖の北の玄関口である塩津港の権益を掌握した統治者層の古墳群として注目される古墳群である。この古保利古墳群の中でもっとも早く築かれたのがⅢ期の前方後方墳である小松古墳であったが、古墳時代前期後半には同じ古墳群の中に深谷古墳（全長約35m）・木戸越古墳（全長約37m）などのやや不定形な前方後円墳が次々と築かれた。強大化する大和政権に対して、墳形を受け入れ模倣することで大和政権に恭順の意を示し、それぞれの支配域の権益を保持したものと考えられている^{（註2）}。一方、古保利古墳群の東に位置する姫塚古墳は、近年の調査によって全長78mを測る布留式古段階の前方後方墳であることが判明している。姫塚古墳は近江最大の前方後方墳であり、当地を領した在地の有力統治者が、古墳時代前期中頃までは前方後方墳を堅持していたことを物語っている。在地統治者の大和政権に対するこうした混沌とした状況は、前期末に至って終止符が打たれることになる。古保利古墳群の南端、山本山の山麓の尾根頂部に整然とした墳形を保つ前方後円墳である若宮山古墳が築かれるのである。全長49mを測り、埴輪と葺石を保ち、後円部には竪穴式石室の存在が推定されている。その位置は、塩津港に向かう船の経由地であり、上陸して北国街道を北上する港湾にも近い。まさしく琵琶湖と陸路の双方を押さえる要衝に、大和政権との直接的なつながりが想定される定型化した前方後円墳が築かれたのである。

湖北地方の南部を流れる天野川流域は、庄内式古段階に当たるⅠ期に法勝寺遺跡 SDX23 という前方後方墳を誕生させた地である。その後も在地の統治者たちによって息長古墳群の一支群である定納古墳群が築かれた。定納古墳群は9基で構成されており、発掘調査が実施されている。調査の結果、1号墳は全長約21.4mの前方後方墳であることが判明しており、長大な木棺や筒形銅器が出土している。また5号墳は長軸22.1m、短軸18mの方墳であり、2基の長大な木棺が埋納され刀子が1点副葬されていた。2号墳・6号墳も方墳の可能性が高い。そのほか7号墳は長軸14m、短軸11.5mを測り、木棺直葬の橢円形墳が想定されている。定納古墳群は、古墳時代前期後半から中期前半と位置づけられており、全体として方形墳を主体に推移したのと考えられる。当地の息長古墳群に明確な円形墳が築かれるのは、古墳時代中期に想定される甲塚1号墳であり、定型化された前方後円墳の出現は中期末の塚の越古墳を待つことになる。当地は北の北国街道と東の中山道が分岐する位置にあり、入江内湖を経て琵琶湖にも通じている。要衝を押さえた息長氏の本拠地とされるが、本格的な前方後円墳の出現は予想に反して遅く、在地の統治者が長く方形墳を踏襲したと考えられる。

一方、古保利古墳群と息長古墳群の間に位置する姉川流域の長浜古墳群では、古墳時代前期後半の可能性を持つ龍ヶ鼻古墳や山の鼻古墳が存在している。龍ヶ鼻古墳は前方後方墳、山の鼻古墳は前方後円墳が想定されており、詳細は不明ながら古墳時代前期後半段階で在地勢力が前方後円墳体制に組み込まれていった可能性が考えられる。

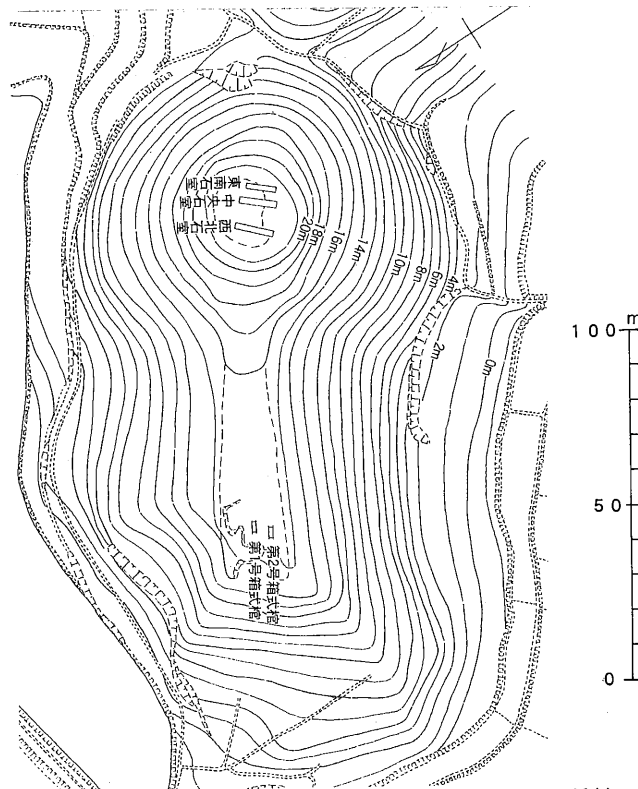
湖東地方の様相 犬上川・愛知川・日野川などの大きな河川をもつ湖東地方は、これらがもたらした肥沃な土砂によって豊かな平野を形成するとともに、琵琶湖岸に天然の港ともなる



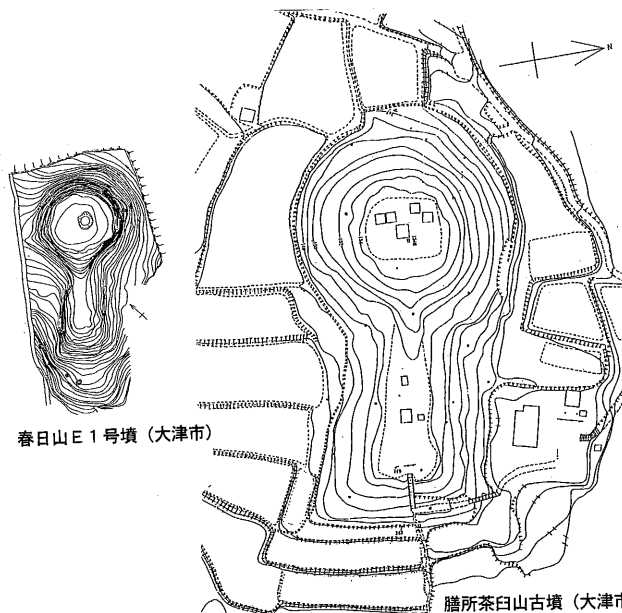
雪野山古墳 (東近江市)



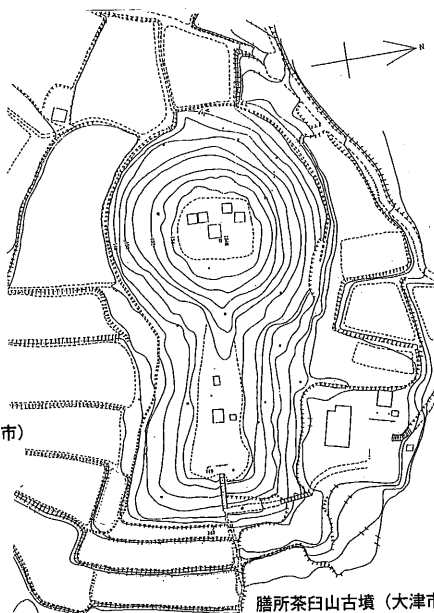
和邇大塚山古墳 (大津市)



安土瓢箪山古墳 (近江八幡市)



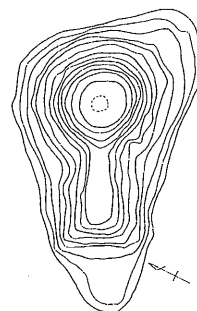
春日山E1号墳 (大津市)



膳所茶臼山古墳 (大津市)



荒神山古墳 (彦根市)



若宮山古墳 (長浜市)

図47 近江の前期前方後円墳

数多くの内湖を生み出し、川を伝って三重県や愛知県に通じる陸路を発達させていた。こうした背景の中で、Ⅰ期には早くも愛知川左岸に神郷亀塚古墳（東近江市）が築かれたのを初例に、Ⅲ期には近江八幡市の浅小井遺跡 SX01など、在地の統治者たちによって平地に前方後方墳が築かれてきた。

ところがⅤ期に相応する布留式古段階に至ると、日野川中流域の山頂に前方後円墳と想定されている雪野山古墳（東近江市）が築造される。全長70mを測り、前方部はややいびつであるが、後円部は2段に築成して葺石を施している。埴輪は認められない。後円部のほぼ中央には竪穴式石室があり、長大な舟形木棺の痕跡を残す粘土床は鮮やかな水銀朱に染まり、三角縁神獣鏡をはじめ5面の鏡と、玉石・銅鏃・鉄製品・革綴冑など豊かな副葬品を備えていた。いまだ定型化された前方後円墳というには十分ではないが、三角縁神獣鏡の配布を受けるなど大和政権とのつながりの中で誕生した古墳である。

古墳時代前期中頃になると、織山の北西に伸びる支丘の先端に安土瓢箪山古墳（近江八幡市安土町）が築造された。現在は内湖から離れているが、かつては内湖に面して立地していたことが知られる。定型化した前方後円墳であり、全長162mは県下最大規模を誇る。葺石と埴輪を保ち、後円部に3基、前方部に2基の埋葬主体があり、後円部の3基はいずれも竪穴式石室を築いている。3基の内、中央石室は長さ6.6mあり、粘土床の上には長大な割竹式木棺が埋置されていた。2面の鏡のほか玉石・筒形銅器・銅鏃・鉄製品・短甲など多量の副葬品が納めていた。

そして古墳時代前期末になって荒神山の山頂付近に全長124mの前方後円墳が、前方部を琵琶湖に向けて築かれるのである。Ⅰ期以降、在地の統治者によって前方後方墳を築造してきた湖東地域は、やがて大和政権とのつながりが強化される中で不十分さを残しつつも前方後円墳の墳形が想定される雪野山古墳を生み、前期中頃には安土瓢箪山古墳、次いで荒神山古墳といった定型化された前方後円墳を誕生させるに至ったのである。湖東地域は、前方後方墳から前方後円墳への流れがもっとも明瞭に追認できる地方といえることができる。

湖南地方の様相 湖南地方を流れる野洲川は、その下流域に広大で肥沃な沖積地を形成しており、弥生時代には服部遺跡・下之郷遺跡・伊勢遺跡などの拠点集落が発達し、大岩山中腹からは24口の銅鐸が発見されている。このような歴史的背景の中で、Ⅳ期には守山市の播磨田東遺跡・塚之越遺跡・経田遺跡・益須寺遺跡・横江遺跡と栗東市の辻遺跡で、またⅤ期には栗東市の岩畑遺跡と野洲市の富波遺跡で次々と前方後方墳が築かれている。ただ、富波遺跡のSZ1が全長42mであるほかは、いずれも規模が小さいのが留意される。

古墳時代前期中頃以降になると、湖南地方の山麓で円形墳の築造が盛んになる。前期中頃の円形墳として、3面の三角縁神獣鏡を出土した野洲市古富波山古墳、三角縁神獣鏡の出土が伝えられる野洲市大岩山古墳と栗東市岡山古墳などが存在する。また前期末の円形墳としては1面の三角縁神獣鏡を出土した瀬田川左岸の織部古墳などが知られる。在地の統治者は、大和政権より三角縁神獣鏡の配布を受けつつ、独自に円形墳の築造を続けることで一定

の距離を保ったと考えられる。このように野洲川流域を中心に早くから開発の進んだ湖南地方は、古墳時代前期を通じて前方後方墳と円形墳の築造に終始し、大和政権の前方後円墳体制に組み込まれることはなかったのである。

湖西地方の様相 一方、湖西地方南部ではⅤ期になって皇子山古墳（大津市）が築かれている。全長60mの前方後方墳で、琵琶湖を見下ろす山頂部に位置しており、試掘調査によって後方部から3基、前方部から1基の主体部が検出されている。墳形は琵琶湖に面する側が丁寧に整備されており、葺石が施されるなど定型化が認められる。また、少し北の独立丘上には、ほぼ同期と考えられる円形墳の壺笠山古墳（大津市）が存在する。直径48mを測り、300点を数える特殊器台形埴輪の破片が採集されている。現在、特殊器台形埴輪が出土した遺跡は全国で24遺跡を数えるが、岡山県（吉備地方）11遺跡、大和地方8遺跡と両地方が群を抜いて多く、近江は壺笠山古墳の1例のみである。埴輪の起源や特殊器台形埴輪の伝播を研究する上で、円形墳である壺笠山古墳の存在は重要である。

この湖西地方南部に最初に前方後円墳が受容されるのは、古墳時代前期中頃の和邇大塚山古墳である。全長72mの和邇大塚山古墳は琵琶湖の北湖と南湖の境にあり、真野川がつくる堅田の小さな三角州の北丘陵頂部に琵琶湖の関門を睨むように前方部を琵琶湖に向けて築いている。前方部1段、後円部2段の段築を持ち、埴輪は認められないが葺石を配した定型化された前方後円墳であり、後円部中央には竪穴式石室を設け、青蓋盤龍鏡1面・玉類・鉄剣2口などが副葬されている。次いで前期末になると、春日山E1号墳や膳所茶臼山古墳が築かれる。春日山E1号墳は、和邇大塚山古墳のおよそ2km南の丘陵頂部に位置する全長60mの前方後円墳である。埴輪や葺石は確認されていないが、前方部1段、後円部2段の段築が想定されている。そして、琵琶湖の入口を押さえる瀬田川右岸の山丘に膳所茶臼山古墳が築かれる。全長124mを測り、前方部2段、後円部3段の段築を施した定型の前方後円墳である。埴輪を埴丘の一部に樹立していたと考えられており、葺石を配し、周濠を設けている。その規模・墳形・築造期などが荒神山古墳によく似ており、やはり前方部を琵琶湖に向けて築いている。このように湖西地方南部の前方後円墳の様相は、まず前期の中頃に和邇大塚山古墳が、次いで前期末に春日山E1号墳や膳所茶臼山古墳が築かれており、その受容のあり方は湖東地方に良く似たものであったことが理解される。

北近畿に接する湖西地方の北部では、若狭街道を通して若狭に至るルートが古くから存在した。北近畿は、朝鮮半島との交流を背景に、弥生時代後期以降、鉄製品やガラス加工などの先進的な技術を保持していたことが知られるが、その技術や製品が若狭街道を経て当地にももたらされている。弥生時代後期の熊野本遺跡（高島市）では、鉄製品や玉作りの工房をもつ高地性集落が丘陵上に営まれ、後期末には北近畿起源の貼石墓が築かれる。貼石墓の組合式木棺からは741点のガラス小玉が出土している。

次いで熊野本古墳群が形成される。熊野本6号墳はⅡ期の前方後方墳であった。全長28mだが、前方部は8mと未発達であった。続く熊野本12号墳は全長30mを測り、前期後半頃

の前方後円墳として注目される。ただ、現状の墳形を見ると、後円部の北側と西側の墳丘裾部が直線的であるなど不定形であり、いまだ畿内型の定型化された前方後円墳には至っていない。

前方後円墳の受容と展開

以上、近江各地方の前方後方墳から前方後円墳に至る様相を概観したが、最初に述べたように、大和政権の進出に対して在地勢力が示した様相は一樣ではなかった。それぞれの地方が弥生時代以来の伝統を内在しつつ前方後方墳を築いており、前方後円墳の受容に当たっても異なる対応を示すことになった。

こうした中であって、湖東地方では布留式古段階にいち早く雪野山古墳が築かれた。前方部がややいびつであり、いまだ定型化された前方後円墳というには十分ではなかったが、竪穴式石室に長大な舟形木棺を配し、三角縁神獣鏡など5面の鏡を副葬するなど大和政権とのつながりの中で誕生した古墳であった。

前期後半になると、湖北地方北部の古保利古墳群では前方後方墳の小松古墳に変わって深谷古墳や木戸越古墳などの前方後円墳が築造され、中部の長浜古墳群でも前方後方墳の龍ヶ鼻古墳に変わって前方後円墳の山の鼻古墳が築かれるようになる。また、湖西地方北部でも、熊野本古墳群で前方後方墳の6号墳に変わって前方後円墳の12号墳が築造されている。同じ古墳群の中に前期後半段階で新たに前方後円墳が加わった意義は大きく、在地勢力が墳形を変えていち早く大和政権下に参画したことを示しているが、新たに築造された前方後円墳はおしなべて墳形が不定形であり、いまだ畿内の定型化された前方後円墳とは言い難いものであった。

一方、湖南地方では野洲川がもたらした肥沃な沖積地に、弥生時代以来の拠点集落を発達させてきた。こうした歴史と伝統を背景にして、当地では古墳時代前期中頃以降、古富波山古墳・大岩山古墳・岡山古墳、そして前期末には織部古墳などの円形墳が次々と築かれた。これらの円形墳からは三角縁神獣鏡などの鏡が出土しており、在地の統治者層が大和政権から三角縁神獣鏡などの配布を受けつつ、独自に円形墳の築造を続けることで大和政権とは一定の距離を保ったと考えられる。

また、湖北地方南部の天野川流域でも、息長古墳群の一支群である定納古墳群では古墳時代前期を通じて前方後方墳や方形墳の築造に終始し、大和政権の前方後円墳体制に組み込まれることはなかった。

このように近江では、前期中頃以降、前方後円墳の墳形を取り込んだり、三角縁神獣鏡などの配布を受け入れることで自己の勢力の温存を図るもの、あるいは伝統的な方形墓に固執するものなど、大和政権の進出に対して在地勢力が示した様相は多様であった。

ところが一方で、湖東地方では前期中頃に安土瓢箪山古墳、前期末には荒神山古墳といった定型化された大型前方後円墳が誕生している。同様に湖西地方南部でも前期中頃に和邇大

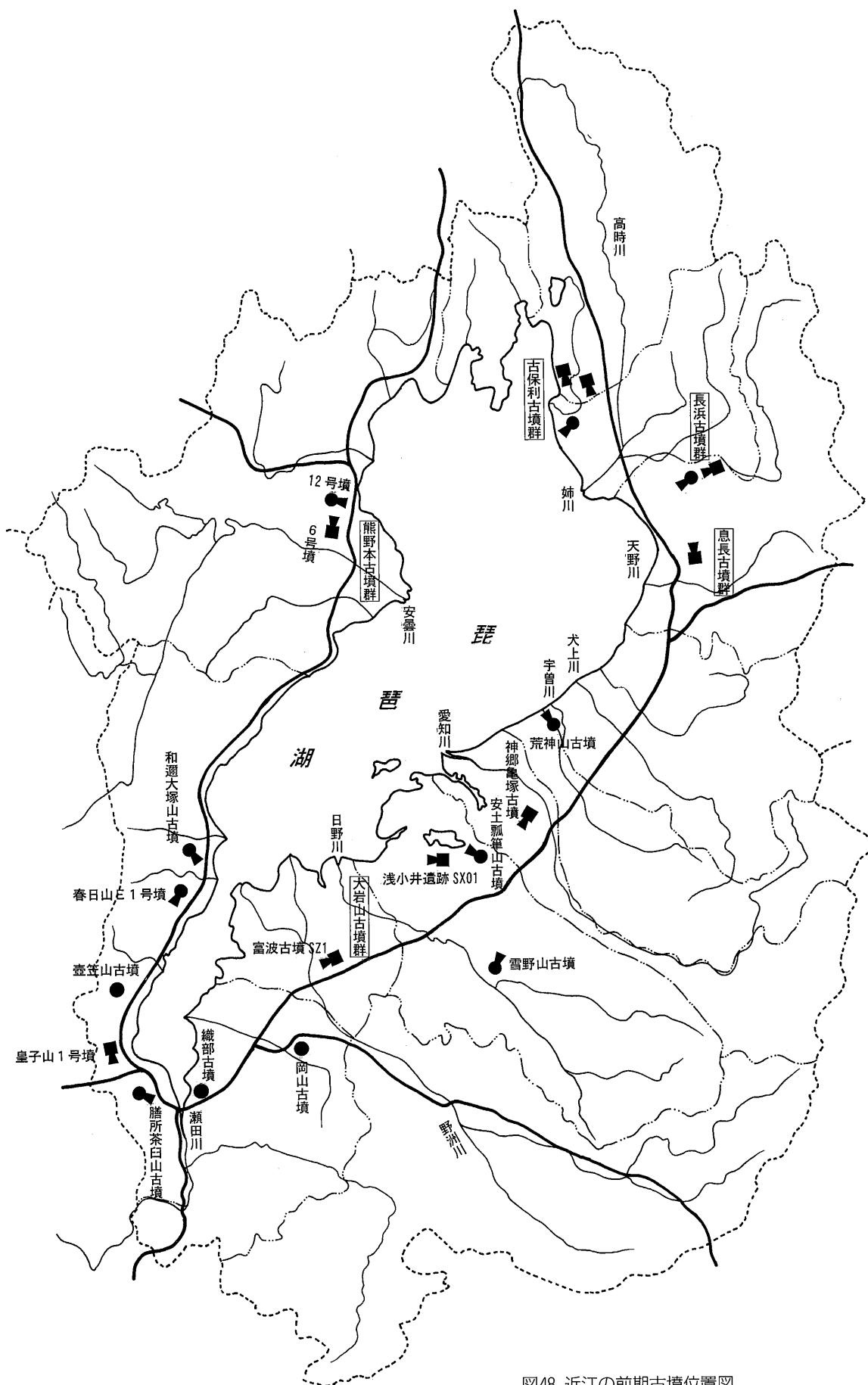


図48 近江の前期古墳位置図

塚山古墳が、次いで前期末に春日山 E1 号墳や膳所茶臼山古墳が姿を現す。また、湖北地方北部でも、前期末に至って若宮山古墳が築かれている。これらの古墳に共通する特徴は、いずれも従来の不定形な前方後円墳とは異なって畿内型の定型化された古墳であり、規模も大型となっている。また、その立地も琵琶湖岸の丘陵に築かれており、平野部よりも琵琶湖側に眺望が開け、前方部を琵琶湖に向ける傾向が認められるなど、琵琶湖を意識した築造となっている。こうした特徴を備えた古墳からは、従来の在地の統治者よりも、大和政権と直接的な関係を保ち、琵琶湖の湖上権益に有力な統治者の姿が想定される。しかも、それらの古墳が連携して、湖上のネットワークを構成している点が注目される。

4 世紀に入って近江に進出するようになった大和政権は、近江の在地勢力と連合し制圧しながら、さらに日本海地域や東海地方へと版図を拡大するため、その進入ルートを確認する必要があった。そのため陸路と水路の両面にわたって交通の要衝を押さえ、その地の在地勢力に前方後円墳という新たな墓制を供与した。大和政権のこうした動きに、在地勢力は墳形や三角縁神獣鏡の受容などによって自己の勢力を確保したり、伝統的な方形墳に固執するなど多様な対応を示しながらも、やがて遅速の差はあったが大和政権の前方後円墳体制に組み込まれていくことになる。

一方、大和政権内部でも前期後半以降、巨大古墳の築造される地域が大和盆地東山麓から盆地北部の佐紀丘陵へ、さらに生駒山を越えて河内平野へと移動しており、主導権の移動に伴って政権構造を強化していった。その過程で、大和政権は従来の国内における版図の拡大に加えて、新たに鉄の入手などを目的として朝鮮半島との直接交渉ルートの整備に乗り出し、弥生時代後期以来の交流がある日本海域に通じるため、琵琶湖の湖上交通の掌握に再び力が注がれるようになった。大和政権の意図に沿って琵琶湖の湖上権益に有力な統治者が任命され、湖上ネットワークを築いて業務を遂行した。琵琶湖岸に琵琶湖を意識する形で築造された畿内型前方後円墳は、彼らのそうした業績を示すモニュメントとして築かれたと考えられる。荒神山古墳をはじめとするこれらの前方後円墳は、まさしく大和政権の新たな政略のなかで誕生した古墳であったといえよう。

【註】

1. 植田文雄『「前方後方墳」出現社会の研究』学生社 2007
2. 田中勝弘『新修彦根市史 第1巻 通史編古代・中世』彦根市 2007
『古墳と寺院—琵琶湖をめぐる古代王権—』サンライズ出版 2008